

H O K K E S H U S H I N P O U

平成21年1月1日



法華宗

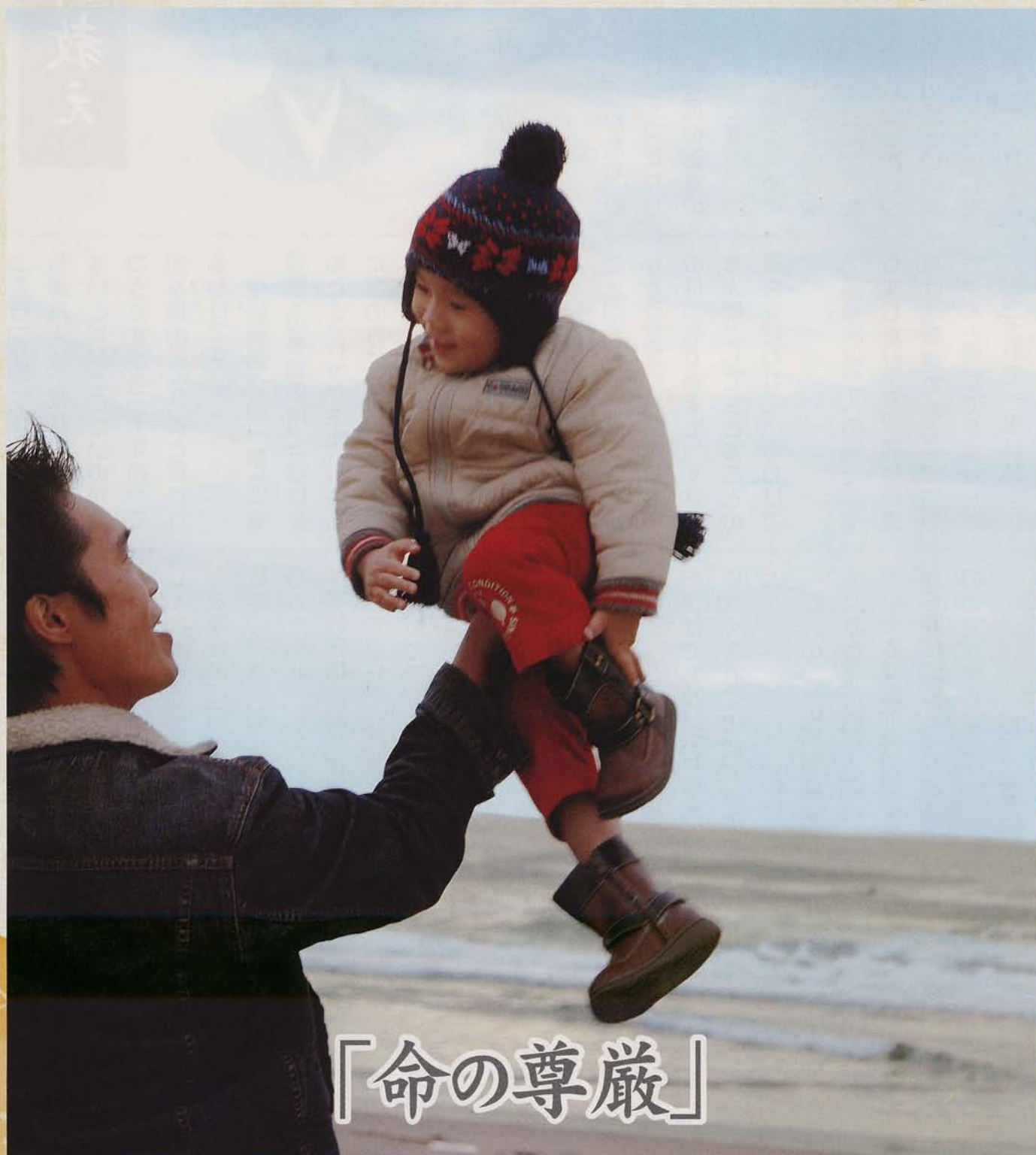
No.128

発行 法華宗宗務院

法華宗ホームページ
www.hokkeshu.or.jp/

信報

皆様に役立つ情報をお届けします。



「命の尊厳」



宗祖の御教え

それ、老狐は塚をあとにせず。白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すらかくのごとし。いわずや人倫をや。

「報恩抄」(定遺二九二頁)



法華宗教学研究所長

大平 宏龍

《人の品格》

『報恩抄』は建治二年(一二七六)七月二十一日に書きあげられた長篇の御遺文です。日蓮聖人が清澄寺(現在、千葉県鴨川市天津小湊町)で出家されたときの御師匠さんは道善房という人でした。その道善房が六月ごろになくなられたので、聖人は師の恩に感謝してこ

の『報恩抄』をしたため、直弟子の日向師をつかわして、清澄の道善房の御墓の前で読ませたのです。「恩」という漢字は「めぐむ、いつくしむ」などの意味をもっています。そこで、たとえば両親から受けたいくしみを父母の恩といえます。それに感謝し、お返しをするのが「恩に報いること」

つまり「報恩」です。しかし私達凡人は、我身のことではないとピンとこないのがふつうですから「子を持って知る親の恩」などと言われるわけです。

今回御紹介の一節は『報恩抄』の最初の所で「狐は死ぬとき、自分が生まれ、住んだ塚の方に頭を向け、中国の晋の時代に毛宝という人は、昔助けてやった白い亀に命を救われた」という故事をあげ、「動物ですらこのように恩を知り恩に報いることがわかつている、人間がそうでなければならぬのは当然である」と。すなわち人間として生きることの品格を問われているわけです。

道善房は聖人の師ではありませんでしたが、お釈迦様の真意は法華経であることが、ちゃんと理解できませんでした。それで一度は聖人に

従うようにみえましたが、最後はやはり阿弥陀信仰にもどってしまいました。しかし、聖人は師の信心を厳しく批判しつつも、御自分が法華経の行者として教主釈尊の御教えを正しく行じられたのも、もとはと言えば御師匠様のおかげであるとして、この一篇をささげられたのです。その末尾は「花は根にかへり、真味は土にとどまる。此功德は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と結ばれています。「花の美しさも根のおかげであり、それは大地に育くまれての故である」と。

聖人の、この格調たかい御文章は、人間が人間として生きる尊厳性(品格)をたからかに示して余りあるものと言えましょう。

合 掌

目次 NO.128

2 「宗祖の御教え」
法華宗教学研究所長

大平 宏龍

3 誰でも分かる

現代に生きている教学
「お互いが喜びあえる世の中を私達が安心して過ごせる生活を」
前法華宗興隆学林専門学校長

三浦 日脩

4 「第十五回教師養成
特別講習会第一期に参加して」
兵庫県 妙照寺内

大柿 現昭

5 第八期生隊員の錬成を実施
法華宗青年伝道隊 運営委員長

斎藤 舜貽

6 写経の勧め

「法華宗写経御手本集」頒布
法華宗教化センター所長

古崎 長生

8 菩薩行研究所
「唯一の方法」

菩薩行研究所長

原井 慈鳳

表紙写真

撮影 平成二十年一月

元旦、初日の出を見ようと千葉の九十九里に行き、シャッターのタイミングを伺っているところ、ある親子に出会いました。「元旦生まれなんです。今日で3歳になりました。」嬉しそうにお父さんが話してくれました。自分や自分の大切な人達の幸せな一年を願うこの日に、この親子の幸せも一緒に願いました。

写真家 小高 雅也

誰でも分かる現代に生きている教学

『お互いが喜びあえる世の中を』
私達が安心して過ごせる生活を』



前法華宗興隆学林専門学校長

三浦 日脩

日蓮大聖人のご本意「立正安国論」の叫び

《しあわせとは》

「今あなたはしあわせですか」。或る人は「しあわせです」と答え、又或る人は「しあわせではありません」と云う人もあります。

人それぞれに感じ方が違うのが普通です。

「しあわせ」とは、相対的なもので、あの人よりしあわせ、あの国の人よりしあわせ、と云ったように、比較のなかで受けとめられていきます。

日蓮大聖人は、私達の住んでいる国、日本の現状を憂い、正しい国の姿勢が保たれ

てこそ、人々が安心して生活できる、国のあるべき道すじ、人間のあるべき道すじを『立正安国論』のなかで示されたのです。

題号の「立正」とは「破邪」の意味で、私達が人間として、誇りをもって生きていく上での、正しい信仰姿勢を失うことなく、誤った信仰姿勢に対してきびしく対処することであり、「安国」とは「顕正」の意味で、釈尊の説かれた最高の教えである法華経、そして、末法現代に生きる私達のために日蓮大聖人が勧められた「本門八品上行所伝

本因下種之南無妙法蓮華経」を信じ、唱え、多くの人達に聞かせることこそ、「まことのしあわせ」が築かれることをこの書物に込められたのであります。

《筋みちを間違えた信仰をただし、筋みちの正しい信仰をみきわめよう》

なぜ国の秩序が乱れ、政治が腐敗するのか。その原因は「鬼神の乱れ」にあると日蓮大聖人は経文を引かれて申されました。国をささえている根本は鬼神、つまり「霊体」にあり、この霊体である鬼神を安んじることが大切であり、法華経による霊体の成仏こそが、国家を安泰させ、国家の秩序は保たれ、人々の生活も平和になると示されています。

現在、私達の周囲には、さまざまな宗教がうずまいています。人々は「しあわせになりたい一心」からすすめるままに、誤った信仰にのめり込んでしまいがちになってしまっています。

教えの筋みちを知らない人達が如何に多いか。私達は信仰の道すじを知らねばなりません。

仏教を説かれた教えの主は釈尊であり、阿弥陀如来や大日如来は架空の仏なのです。

たくさんな教えのなかで、末法現代に生きる私達は、悟りの教えでなく信心の教えによって救われ、そこにお題目の信心があるのです。究極の真理一念三千を、教えの働きとしてつんだ「力」こそが南無妙法蓮華経なのです。この力によって世の中を淨化し、誤りのない人生を志すのです。

《「謗法」を犯さないことが大切》

正しい信仰は、私達が生活していくうえで必要不可欠なものです。それは人生に悔いのない生き方が大切だからです。充実した一生はどんなにか素晴らしいことでしょう。誤った信仰は人生を破滅させてしまいます。

まず、祀られている本尊は何かを見極め、法華宗以外の佛寺や僧侶に「布施」をしてはなりません。却って悪業を積むことになってしまいます。

《喜びあえる世の中に信心を高め、多くの人にすすめよう》

日蓮大聖人の時代と同じように、今日の社会も大変な不安をかかえた時代です。

世界はより複雑になり、私達の国日本も、平和を守るため一層の努力が必要です。

日蓮大聖人は、私達にとつて最も大切なことは、早く南無妙法蓮華経の信仰にめざめ、お題目の世界、つまり「秩序ある社会」が実現すれば、まことの平和が実現し、喜びあえる社会、安心して住める生活が生まれると仰せられ、特に自分にだけでなく、世の多くの人達に「お題目にめざめさせる心」を伝えましよう、と、「絶対のしあわせ」がここに実現することを叫ばれたのであります。

「第十五回教師養成 特別講習会第一期に参加して」

兵庫県 妙照寺内

大柿 現昭

平成二十年九月一日～六日まで千葉県茂原市大本山鷲山寺（御開山日弁大正師）において、受講させて頂き有り難うございました。

私の難行苦行の始まりは、

受講できるか否か？鷲山寺へ迷わずに到着できるからでした。東京駅では、何度も聞きながら京葉線に着き、電車のドアが開くのを待っていると「茂原に行きますか」と同じ質問をする女性の声がした。その容貌や手荷物の様子から受講生と察し自己紹介したところ同じ兵庫県人で、淡路島からの受講生と分かり気が軽くなり、帰りの電車も一緒に揃って頂く御縁をいただいた。

十三時の開講式に始ま

り、オリエンテーションに続いて、大塚日正猥下より「僧侶の心得Ⅰ」の講義を頂戴し、受講生の自己紹介では「私の第一目標は声量の増幅」ですと告げた。「夕勤行」の時間には先生方の入堂偈に導かれ、その奥行きと深みの有る声の響きは、まさに私が目標とするもので感激し感動した。

御宝前のお厨子が特別に御開帳され、お祖師様のお姿を仰ぎ見た時、余りにも大きなお姿と御威光に驚くと共に心身共に吸い込まれ「お力を与えて下さる・守って下さる」と強く感じ、開山堂で日弁大正師にお会いして更に心身が引き締まる。

十九時からの「法要式実

習」では本堂にてお題目の太鼓を叩く班と、開山堂にてお経を唱える班に分かれる。猛暑汗だくの中での、御指導に「応えなくては」の一心で皆さんと共に頑張った。

翌日からは五時起床で六時から朝勤行・体操・清掃等に始まり、長時間に渡る様々な講義を受けて教学を学び、暑さと睡魔と足の痺れとの戦いの日々が続いた。「何もかも行や」と励まし合う。

精一杯大きな声で唱題読経の日々に「明日は声が出なくなるのでは…」と心配したが、有り難い事に声は次第に安定し、叩く太鼓もリズムカルになった。「お力を頂戴している・守って頂いて

いる」としか思えなかった。教学の部では、本門八品上行所伝本因下種の法華經に、何の疑念も無く一心に信じ下種行できると決意した。

作法実習では、始めは進退動作や礼拝がギクシャクしていたが、少しはスムーズに行えるようになった。

日正猥下の「僧侶の心得Ⅱ」と題した講義で、病氣入院患者のお話が有りました。身に詰まされるお話に止めどなく涙が流れ落ち、お題目の不思議な力と、草木も人も魂が宿るのは同じ等の内容で益々信心が篤くなった。

受講終了前日の朝、境内で草取りをしながら「明日は

鷲山寺、お祖師様や日弁大正師・先生方・獅子吼会・陰で支えて下さった方々や受講生とお別れか」と涙した。

最終日は更に、お祖師様と日弁大正師の御威光とお題目の力を頂戴した事を確信し、先生方に見守られながら鷲山寺を後にした。

九月一日に自宅を発つ時に膨らみかけていた稲穂も、帰宅すると垂れかけていた。在家出身であるが一念発起して真剣に仏門に飛び込んだ私に「こうでありなさいよ」と語りかけられているかに思えた。受講のお陰で私の頭も少しは垂れたかなと感じ、法華宗で良かったと思いました。

第八期生隊員の錬成を実施

法華宗青年伝道隊運営委員長

斎藤 舜駘

法華宗青年伝道隊の新規

隊員を養成する錬成では「人前で堂々と自分の考えを話す」ことができることを主な目標に訓練が繰り返される。堂内での法話・街頭での説法・伝道車を走らせながらの街宣。みな話す技術が違ふ。この錬成で行われる伝統の実地訓練とは、次のようなものだ。

京都でいちばん賑やかな交差点、四条河原町。青年伝道隊の錬成も終わりに近づいた頃、錬成の道場となった大本山本願寺様から街頭唱題行をしながらここに到着した候補生たちは、整然と交差点の四隅に分かれた。まわりはどこを見渡しても人・人。それぞれのグループ

は旗持ち、教籤配り、そして説法を順に務める。通行人たちは私たちの前を忙しそうに通る過ぎてゆく。話を聞いてくれる人などほとんどいない。それどころか、迷惑そうない顔で一瞥して通り過ぎてゆく人もいる。いよいよ説法の順番が自分に回ってきた。脚が震えているのが分かる。ハンドマイクを受け取って所定の位置に立った。

頭の中が真っ白になる。自分でいったい何をしゃべっているのか分からない。とにかく、「大きな声でハキハキ話すこと」、「間を充分に取ること」、「この二点に気力を集中した。時間にするとたかだか五、六分くらいだったように思う。



「ふーっ。終わった」

全員の実習が終わって、太鼓を叩きながらの帰り道、「自分は鎌倉の街頭で日蓮聖人がされたことと同じことをやったんだ」という大それた充足感で満ちあふれていた。

この貴重な経験が、その後の私の伝道隊員として、また僧侶として法話をする時の大きな自信となっている。すべての隊員が多かれ少なかれ同じように感じているの

ではないだろうか。

法華宗青年伝道隊は、このような訓練を積んだ青年僧たちが今日も全国に布教活動を展開しています。

この度、伝道隊の活動を更に強化するため、千葉県茂原市の大本山鷲山寺様を道場に、三月六日より四泊五日の日程で第八期生の錬成を行います。鷲山寺様、並びに関係者の皆様には何かとお世話になることと存じますが、どうかよろしく願い申し上げます。



伝道隊後援会より

三島昭栄上人より事務局長という大任を引き継ぎました赤田泰宏です。

この度の錬成で第八期生のフレッシュな隊員たちが増員され、全国に活発な布教活動を展開されること、たいへん頼もしく思っています。後援会は隊員のみならずの活動を今後ますます支援してゆくつもりです。

「法華宗信報」読者のみなさんのご協力をお願いいたします。

郵便振替

郵便振替口座番号

01110-0-59111

口座名

法華宗青年伝道隊後援会

心得 写経の

《はじめに》

写経は、法華經に説かれて
いる「五種法師」(受持・読・
誦・解説・書写)の書写行にあ
たる大変ありがたい修行の
一つです。我々法華宗信徒に
とっては、題目口唱が最も大
切な正行となりますが、さら
に助行として書写行をする
ことで、より一層に信行を深
めることになります。

《心得・作法》

○写経に使う道具(細筆・下

敷き・文鎮・硯・墨)を用意
しましょう。

○写経をはじめる前に部屋
を掃除し、仏間のある家で
は仏間で、なければ気持ち
の落ち着く部屋を選び、室
内を清めてお香をたきし
め、ご自身の身を整えま
しょう。

○なるべく硯で墨をすり、マ
スク等にて息がお経文に
かからないようにして、塗
香を手に塗り、心を落ち着
かせましょう。

○合掌してお題目を唱えて
から始めましょう。

○日蓮大聖人は「一^{いち}一の文字
は我等が目には黒き文字
と見え候へども、佛の御眼
には一一に皆御佛なり。」
と御指南されております。
一字一字が仏さまですか
ら、丁寧に心を込めて書き
ましょう。

○最後に写経の目的である
願文(△△家先祖代々追善

供養、当病平癒祈願、安産
祈願、受験合格祈願など)
と書写の年月日、願主(氏
名 拝写)を記入しましょ
う。

○合掌礼拝して、お題目を唱
えて終わります。

○妙法蓮華經法師品に「經典
を受持し解説すると共に、
これを書写すれば、よく大
願を成就する」とあります
ように、書写行は大変功德
のある修行です。書き終え
た経文は法華宗の各御本
山及び、寺院・教会に納経
し、お題目を唱えましょ
う。

○以上は、あくまで基本的な
方法です。あまりこだわら
ず写経の心を生かした、自
分のできるところから始
めてみてください。御家族
をはじめ、お知り合いにも
お勧めいただき、一緒に書
写行に励み共に功德をお
積みください。

※納経に関してのご注意

納経する際は、事前に連絡しその方法を確認してください。
なお、「法華宗教化センター」にても納経を受け付けており
ますのでお問い合わせ下さい。

お問い合わせ先

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1
法華宗宗務院内「法華宗教化センター」宛

電話 03-5614-3055





写経の勧め

「法華宗写経御手本集」頒布

法華宗教化センター所長 吉崎 長生

今宗門では僧俗を挙げて「菩薩行の実践」を推進し、各御本山では奉讃事業を展開しております。法華宗教化センターでは、この度「法華宗写経御手本集」を頒布いたすこととなりました。この良き機会にぜひ慶讃納経をお勧めいたします。

私達が日々お唱えしている法華経には信仰上、写経による功德が随所に強調されております。

法華経の修行には次の五種類が有ります。

- ①受持^{じゆじ}… 法華経を聞き、信じて日々の生活に信仰心をもつこと
- ②読^{どく}… 法華経を見て経文を読むこと
- ③誦^{じゆ}… 法華経を暗記して声に出して読むこと
- ④解説^{げせつ}… 法華経を理解し、他の人に説くこと
- ⑤書写^{しよしゃ}… 法華経を書き写すこと
これら五種^{ごしゆぎやう}行のうち書写

行が写経です。法華経は一文一文字が仏様そのものがありますから、心をこめて拝写することで信心を増進する手助けとなる修行です。

写経は法華経を書き写すことで自然に読誦します。根気よく姿勢を保つことで受持します。仏様そのままをいただくのですからよく解説することができます。

現代のように、めまぐるしく移り変わる世の中では、生活の中で気持ちを落ち着かせて、心を解放する時間を持つことは難しいようです。

しかし法華経の文字を追っていると不思議に心が落ち着き、文字に集中して何事にもとらわれない自分に気付かされます。これこそ法華経の功德なのです。

私達が行う写経は、南無妙法蓮華経のお題目を何回も拝写するものと、法華経^{にじゅう}二十八品^{はつぽん}の中、特に從地涌出品^{じゅうぢゆつぽん}第十五から囑累品^{そくるい}第二十二ま

での本門八品、すべての經典の肝心となる部分を拝写することが大切です。これによって、ご先祖様の追善供養とともに自らの罪障消滅をし、家内安全、子孫繁栄等の功德をいただけるのです。この度のセットは「方便品第二」「如來寿量品第十六」「如來神力品第二十一」の略三品です。どうぞ、この機会に法華経信行の肝心である書写行つまり写経をし、信心増進に役立ててください。



「唯一の方法」

菩薩行研究所長

原井 慈鳳



アメリカの住宅金融(サブプライムローン)問題が全世界に激震を与え、日本の株式も乱降下、多大の富が消えてしまいました。世界各国首脳もこの危機を食い止めようと躍起ですが、速効の妙案はなかなか出て参りません。

右肩上がりを前提とする経済政策が問われていますが、利益の追求が過ぎて、バブルの破綻がくることは確かです。「危機」という文字が新聞にも本にも踊っているのは、誰しも気づく事です。

しかし、誰しも「何とかなるだろう」「誰かが何とかするだろう」と思っています。でも、何とかなりません。誰も何とかできません。

誰しも「危機」と思いながら、なぜ地獄に堕ちてゆかなけれ

ばならないのでしょうか。

それは自分だけは利益を得よう。自分だけは地獄へ堕ちたくない。その心です。

芥川龍之介の『クモの糸』に出てくる「カンダタ」という人物。自分だけが地獄から逃れようと、お釈迦様が極楽から降りして下さったクモの糸をよじ登りました。生涯の中で一匹のクモを踏み殺すのを止め、命を助けたという、たった一つのよい事をした罪人をお釈迦様は救おうとされたのです。

しかし、同じく地獄から逃れようとして、その同じクモの糸にぶら下がってくる多くの罪人たちがいます。

自分のために、他を蹴落とそうとするカンダタの心の貧しさのため、クモの糸は切れてしまいました。カンダタは罪人と共々また地獄へ堕ちて行きました。

政・官・業界の方々もカンダタ様が多いのは、毎日のニュースが伝えています。

地球上にある物のエネルギーの総和は、熱力学の法則によれば一定です。利益を一人じめしようとする者が多ければ、一方で苦しむ人が増大するのです。飽くなき利益の追求は市場経済原理であってその陰で、必ず誰かが泣いてい

ます。菩薩行とは相反する原理です。

ただ、世の中は物のみが支配しているわけではありません。菩薩行は利益を得たら他に施す心です。他に供養する心が地獄から救われる唯一の方法です。人々の住処である国では、世法によって物事が動かされております。

日蓮大聖人は「人々の生活の、世法の上に仏法を立てよ」と叫ばれました。他の宗祖は仏法を個人の問題、心の問題として、世法を問いませんでした。

我々は実生活と仏法を切り離せないのです。実生活そのもの、人々の住処そのものを悪化から改善してゆかなければ意味がないからです。

宗祖はご自身で「世法をもって論ずれば日本一貧しい者であるが、仏法をもって論ずれば世界一富める者なり」と申されました。宗祖は聖人ですから物の貧しさは物ともされませんが、私達は、実生活の中で何を幸せとするのかが問われているのです。即ち「信仰の寸心を改めて実乗の一善に帰せよ」先ず自分が変わらなければ、危機の世の中は変わりません。実践する菩薩行それ自体が、唯一の方法なのです。

編集
後記

「立正安国論」進覧750年の聖年をお迎えいたしました。善悪を見極める信仰に励みましょう。

新しい年のはじまりです。何事もはじまりは大切にしたいものです。「法華宗信報」の編集をさせて頂いてから、はやいもの

でもうすぐ一年を迎えます。初心を忘れずに精進して参りますので、宜しくお願いいたします。

はじめ良ければすべてよし、楽しい一年になりますように!

編集長 佐藤 正純

法華宗信報

No.128

平成21年1月1日発行 発行人/原井 慈鳳 編集人/佐藤 正純

編集部/〒299-4341 千葉県長生郡長生村宮成373-1 清泰寺内 TEL.0475-32-0402

発行所/〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院 TEL.03-5614-3055

印刷所/株式会社マックス